

三之丸石垣の謎

名古屋城の石垣は、徳川家康の命によって全国の大名が協力して築いたものです。しかし実は、その中には「誰が築いたのか、はっきりしない石垣」があることをご存じでしょうか。

その一つが三之丸石垣です。三之丸とは名古屋城南側及び東部の広大な曲輪で、現在は市役所等がある官公庁街となっています。三之丸には清水門、御園門など5つの門があり、清水門以外には周囲に石垣が築かれました。史料によると、三之丸の工事には金森家などの大名が関わったとされています（服部 2023）。しかし、石垣の表面には、前田家など三之丸以外の工事に携わった大名の刻印が多く刻まれています。史料では金森家らが築いたとされるのに、これはどういうことなのでしょう。

その理由を考えるヒントが、かつて御園門があった愛知県図書館南側の石垣にあります。この石垣をよく見ると、石垣角の大きな石材に、「進上」（献上のこと）と刻まれています。さらに石材をみると、この石は「和泉砂岩」という、名古屋城ではあまり使われない珍しい石でした。名古屋城普請でこれを使ったのは浅野家、山内家のみなので（田口・二橋・大山 2026）、どちらかが家康へこの石材を献上したことが想定されます。

以上のことから、三之丸の石垣の一部は前田家、浅野家などの大名が石材を提供し、金森家などが石積みを担当したとも考えられそうです。

名古屋城普請などの公儀普請は戦時の軍役に代わるものとされ、諸大名は功績をあげようと熱心に取り組みました。しかし、それ自体は土木工事であり、戦場での派手な活躍に比べると、どの大名が頑張ったのか差異が見えづらいとい

う問題もありました（谷 2025）。そこで一部の大名は、自分の担当外の工事にまで石を献上し、家康への忠誠心を示そうとした、そんな思いがあったのかもしれませんが。

三之丸を歩くときは、大名たちに思いをはせながら、ぜひ石垣を間近でご覧ください。

（学芸員 二橋慶太郎）



▲写真1 御園門跡付近の石垣(白丸内「進上」の刻字あり)



▲写真2 「進上」の刻字

参考文献

- 田口一男、二橋慶太郎、大山僚介 2026 「名古屋城石垣の新発見 石材「和泉砂岩」について」『名古屋城調査研究センター研究紀要7号』
- 谷徹也 2025 『豊臣政権の統治構造』名古屋大学出版会
- 服部英雄 2023 「名古屋城築城考・普請編」『名古屋城調査研究センター研究紀要3号』



名古屋城 調査研究センターだより

文献資料担当より

名古屋城の石垣と「穴太」

名古屋城が築城された慶長15年(1610)頃は、築城技術が飛躍的に発展した時期で、全国各地で大規模な石垣を持つ城郭が築かれました。当時の築城では「穴太」と呼ばれた石垣構築の技術を有する人々が動員されました。穴太とは本来、近江国(滋賀県)にある地名で、同地の石積みを得意とする人々が豊臣秀吉の伏見城築城などに関わったことから、後年には居住地を問わず、石垣構築を生業とする人々を「穴太」と呼ぶようになりました。

名古屋城の石垣といえば、諸大名による公儀普請が注目されますが、穴太の関与を示す古文書も2点確認されています。いずれも、のちに「公儀穴太」と呼ばれた穴太(戸波)駿河という人物が、幕府の普請奉行に作料(手当)を請求する内容です。

1点目の古文書では、慶長16年に穴太駿河が小天守石垣の普請を実施したことが分かります。具体的な作業内容は書かれていませんが、当時の平面図や現況石垣の状況から、前年に加藤清正が築いた小天守入口の位置を変更するため、幕府が穴太を動員したと推測されています。

2点目の古文書(右引用)では、慶長17年に穴太駿河が「本丸北東之とい(土居)石垣」の普請を実施したことが分かります。土居石垣とは、本丸内側の土塁下部に築かれた石垣を指すとみられます。また、慶長19年に風水害で崩れた本丸北東の石垣を福島正則が修復していますが、その際の書状には「公儀普請当時、石垣の表口は福島

家、内面のたたき土居は幕府の普請奉行が担当した」と記されています。これらの史料から、諸大名による公儀普請が完了した後も幕府が引き続き名古屋城普請を監督しており、穴太を動員して石垣を手直ししていた様子うかがえます。

城郭普請における穴太の具体的な関与については、同時代史料にはあまり記されていません。今回紹介した古文書は、名古屋城の石垣と穴太の関わりを示す貴重な史料といえます。

【註】* 慶長19年8月12日 福島正則書状 (高橋正彦編「大工頭 中井家文書」(慶応通信、1983年) 翻刻所収)

(学芸員 堀内亮介)



▲慶長17年6月23日 穴太駿河扶持米請取状(名古屋築城文書) (名古屋温故會繪葉書 第百八十九輯 戸田鈞氏所蔵 史料繪葉書)

請取御扶持方之事 合式石六斗者 子六月八日方 七月晦日まで 是八尾州名古屋御本丸北東之とい 仕候時御手傳尾張衆也 慶長拾七年 子六月廿三日 穴太駿河(花押) 佐久間河内守殿 瀧川豊前守殿	右是八尾州なごや御本丸北東之 とい石垣仕候時也、御扶持方無相違 可有御渡者也 慶長十七年 六月廿三日 瀧川豊前守 (花押) 佐久間河内守 (花押) 原田右衛門殿 寺西藤左衛門殿 藤田民部殿
---	--

◀ 翻刻(裏面) ▶

◀ 翻刻(表面) ▶

いしちょうば 名古屋城石垣石丁場跡の調査—三河湾石丁場群—

名古屋城石垣石丁場跡とは

名古屋城は徳川家康の命により築城が開始され、西国・北国の大名を中心とした 20 家の公儀普請によって総延長約 10km の石垣が築かれました。この長大な石垣を築くためには大量の石材が必要でした。名古屋城築城に伴って、石垣石材を採石・加工した石丁場の遺跡を「名古屋城石垣石丁場跡」と呼び、今も各地に残されています。名古屋城の石丁場は、尾張・三河・美濃地域を中心として広範囲に分布しており、名古屋城付近にはみられないこと、大半が小規模な石丁場であること、多種多様な石材を採石していることが特徴といえます。

石丁場跡では、目印となる刻印、採石のための矢穴がつけられた岩盤や残石、石材を加工した際に生じた碎片、石材の搬出路である石曳道など採石・加工段階の様々な痕跡をみることができます。また、名古屋城石垣は「丁場割図」によって各石垣の担当大名が分かっており、築城時の石垣も多く残されているため、石丁場跡の刻印や矢穴と比較することができます。名古屋城石垣石丁場跡は、当時の採石・加工技術や公儀普請によって築かれた名古屋城築城の実態を知るために欠かすことのできない重要な遺跡です。

主な名古屋城石垣石丁場跡

名古屋城の石丁場の分布は大きく2種類に分けることができます。築城に伴って新たに開発された濃尾平野周縁部や三河湾周辺の石丁場と、築城に参加した大名領地内の石丁場です。石垣に使用された量でみると、大部分は前者で採石された石材が用いられており、後者は角石の一部など局所的に用いられているのみです。このため、基本的には尾張・三河・美濃地域で採石され、石垣の重要となる部分には自らの領地から搬入した石材を用いる大名もいたと考えられます。

名古屋城の石垣に用いられている岩石種は、主に花崗閃緑岩・花崗岩・砂岩の3種類で、それぞれ採石地域が異なります。花崗閃緑岩は三河湾の島嶼や沿岸部、花崗岩は尾張北東部の庄内川流域付近など、砂岩は揖斐川流域などで石丁場跡が確認されています。どれも海や河川が近く、水上運搬で名古屋城付近まで運ばれたと考えられます。このうち規模が比較的大きいのは篠島・船来山・岩崎山などで、それ以外の多くは小規模な石丁場であった可能性があります。



図1 遠隔地の主な名古屋城石丁場跡



図2 尾張・三河・美濃地域の主な名古屋城石丁場跡

三河湾石丁場群の調査

三河湾の島嶼や沿岸部に分布する石丁場「三河湾石丁場群」には、南知多町篠島のほか、西尾市幡豆地域の前島・沖島など、蒲郡市の西浦半島や竹島などがあります。

各石丁場跡は、これまで自治体史編さんなどをきっかけとして残石の分布や刻印などが調査されてきました。しかし、これらの報告では調査時の技術的な課題により、現地で調査成果を再確認することが難しいデータとなっていました。このため、関係自治体と協力し、最新技術を用いて令和4年度（2022）から石丁場跡の再調査を行っています。

西尾市前島石丁場跡は、東幡豆海岸から約 0.5km 沖合の前島に残る石丁場跡です。干潮時には砂州が現れ、トンボロ現象によって歩いて渡ることができます。前島石丁場跡は『幡豆町史』にて一度調査されていましたが、改めて各種調査を実施しました。まず、測量調査では、UAV 撮影によるフォトグラメトリで島全体の3Dモデルを作成しました。これをベースに分布調査を行い、海岸にある石材を1点ずつ改めて確認したところ、既報より多くの残石を発見し、96個あることが分かりました。それぞれ座標も計測し、詳細な分布図を新たに作成しました。矢穴調査では、矢穴の形状を計測し、名古屋城の慶長期矢穴と類似する矢穴が多数を占めていることを確認しました。刻印調査では、発見した5種8点の刻印の組み合わせを名古屋城と比較し、福島正則丁場の可能性が高いことを明らかにしました。また、石質調査でも前島石丁場跡に特徴的なアプライト様花崗岩が福島正則が担当した石垣にあることを確認しました。

西尾市沖島石丁場跡は、前島から南に約 0.6km 沖合の沖島に残る石丁場跡で、前島石丁場跡と同様の再調査を実施しました。調査の結果、分布調査では61個の残石を確認し、既報の2倍以上の規模であることが分かったほか、矢穴や石質で名古屋城石垣との類似性を改めて確認することができました。

こうした多角的かつ最新技術を用いた調査を積み重ねていくことで、名古屋城築城の実態がより鮮明になってきています。

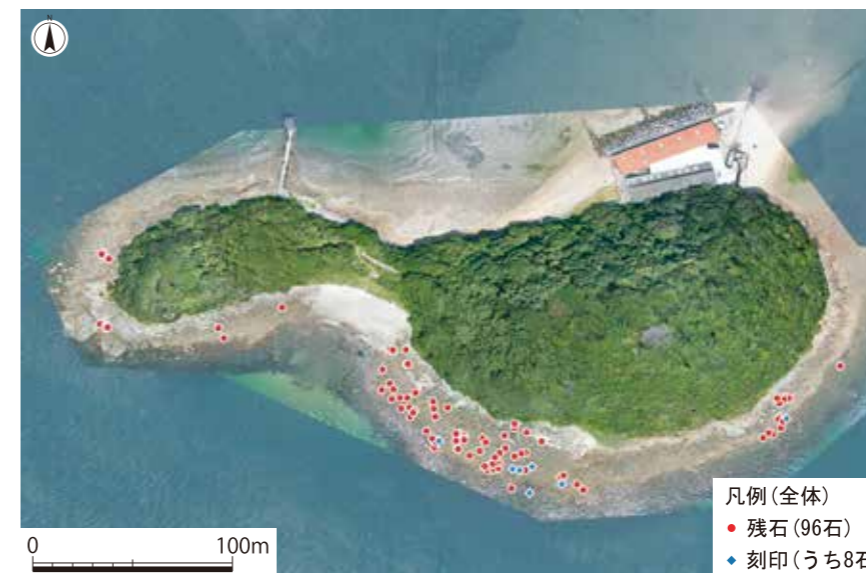


図4 西尾市前島石丁場跡残石・刻印分布図

【引用文献】大村陸・浅岡優・高田祐一・田口一男・二橋慶太郎・井口喜景・小山圭嗣 2025「西尾市前島石丁場跡調査報告」『名古屋城調査研究センター研究紀要』第6号
大村陸・井口喜景・田口一男・二橋慶太郎・寺井崇浩・高田祐一 2026『名古屋城石垣石丁場跡調査報告書-西尾市前島石丁場跡・沖島石丁場跡-』名古屋城調査研究センター（学芸員 大村陸）



図3 蒲郡市竹島石丁場跡



図5 西尾市前島石丁場跡



図6 西尾市沖島石丁場跡